

vol.

市史編さん広報紙

21

たちかわ物語



Mar.2026

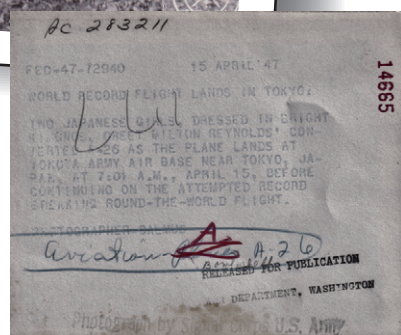
TA CHI KA WA MO NO GA TA RI



立川の歴史
ようこそ、「日本の中のアメリカ」へ
米軍基地
記録は空を超えて

写真上は、世界一周飛行の世界記録挑戦中、給油のため横田基地へ着陸するA-26と、歓迎する着物の少女たち。写真右は、上の紙焼き写真の裏に書かれている記録。(昭和22(1947)年4月、米国国立公文書館蔵、RG111SC BOX546)

- 特集1では、「立川市の昭和100年」と題し、市史編さん委員会委員の鈴木功さんと豊泉喜一さんが酒井大史市長とまちの歴史を語ったテレビ番組でのやりとりと、番組ではご紹介しきれなかった内容を紙面でレポートします。
- 特集2では、上の写真のように立川市周辺にあった米軍基地に関する記録が米国に多数保管されていることがわかったため、その調査成果の一端をご紹介します。
- 連載企画「資料をよむ」では、『たちかわ物語』19号に掲載した続編として、「立川流」の祖・仁寛にんかんの後半生について解説します。



特集1

市史編さん委員とちよ〜長々と、たどる立川市の昭和100年……2

特集2

米国国立公文書館調査からみえる立川市のすがた……4

連載企画

- 資料をよむ 仁寛の付法活動と「立川流」……8
- *令和7年10月～令和8年3月における各支部の活動報告……11
- *受贈図書・資料提供者一覧……11
- *事務局通信(最新刊および既存刊行物のご案内)……12

目次

市史編さん委員と「長っ、たどる」 立川市の昭和100年

各市の市長が司会進行役となってまちを紹介するJ:COMの地域情報番組「長っ、たどる」。「立川市の昭和100年」と銘打って行われた令和7(2025)年10月の放送では、立川市史編さん委員会の委員であり、95年間、立川とともに生きてこられた鈴木功さんと豊泉喜一さんを招いて、酒井大史市長と戦中・戦後から現在までをたどる「立川市の歴史を散歩」しました。本放送は終了しましたが、貴重なお話の一部を紙上でお伝えします。



豊泉 喜一さん (現・柏町出身) 酒井 大史市長 (現・曙町出身) 鈴木 功さん (現・富士見町出身)

地域の歴史には、記録や文書に残らない、人の記憶や思い出にだけ残っていることも多くあります。今回ご出演いただいたお二人はともに昭和5(1930)年生まれで、立川市役所に長く勤めていらした鈴木さんと、農業のかたわら長年、市議会議員も務められた豊泉さんです。「軍都」から「商都」へと移り変わっていったまちの姿、その折々の暮らしや感じてきた思いなど、地域の変化を間近に見てこられたお二人ならではのお話が語られました。



子どもの頃の思い出 ～戦前の昭和～



私なんか生まれた頃は、自分の住んでる家に蚕飼ってたんですよ。畳の下は蚕飼えるよう板の間になってて、5月になると家中の畳全部上げちゃって、そこで飼うんです。夜寝ててね、蚕が桑の葉を食べる音がザァ〜っていう、雨が降ってような音がするんですよ。



私が小さい頃は(奥多摩街道は)砂利道で、やがて舗装されてアスファルトに。そのアスファルトが夏、ドロドロに溶けてね。でも固まると、冬は「石蹴り」したり。ほとんど車は通らないんですよ。いろいろな、きりがいい遊びで、楽しい少年時代を過ごしました。



戦時中の記憶 ～戦争と立川・砂川～



私は青梅の農林学校へ行ってたんで、食糧関係のところの動員だったんですよ。軍隊へ納めるみそをつくる工場があって、八王子へ。だけどやっぱり8月2日の八王子の空襲で全焼しちゃった。



学徒動員で、私も昭和飛行機(現・昭島市)に行ってたんですけど、ダグラスDC-3型って飛行機をつくらせて、それをお手伝いしてたんですけど。機銃掃射で逃げそこなって、学生が一人亡くなったんですね。それを目の前で見たんですね。結構、怖い思い出してますね。



鈴木さん宅での防空訓練。昭和18(1943)年頃、(立川市歴史民俗資料館蔵)

ちょうどお二人とも10代の頃、昭和16(1941)年から20(1945)年の8月15日までが太平洋戦争でしたよね。



戦争が終わって ～玉音放送を聞いて～



私はどっかかという、率直な意見だと、ホッとした。なんでホッとしたかっていうと、ずうっと一年半ぐらい、飛行機づくりに学徒動員で行って、勉強してなかったからね、いっさい勉強できなかった。で、その玉音放送を聞いたときに、「もう明日から勉強できるな」という気持ちがいっぱいでした。で、ホッとした。



私もホッとして。でも鈴木さんすごいよ、勉強っていうふうで……。私はもう空襲がなくなったっていうのが一番ね、玉音放送聞いたとき、それが一番ホッとしたというのと……。私はね、学校やめちゃったんですよ、終戦で。だから鈴木さんとは正反対、逆だった。



戦後の暮らし ～基地のまちになって～



戦前よりも戦後がね、農産物の盗難がすごかったんですよ。うちの畑もずいぶんやられたんですよ。で、青年団で団員の人と一緒にナイトウォッチっていったね。MP（米軍憲兵隊）はMPでパトロールして、青年団は青年団で、野菜や果物の盗難を防ぐために、そういうのを夜回って歩くんですよ。



立川駅南口付近を巡回するMPの車両
(昭和35(1960)年頃、小山 美恵子氏寄贈)



業者が、私のうちの庭を借りて、米軍が残したその残飯を毎日トラックで持って来て、それを豚の餌として売るわけですよ。その中に食べ物のね、当時私なんかソーセージだとかハムだとか、バターも見たことない、チーズも見たことないし、そういうものがジャブジャブ出てくるわけ。

新しい市の誕生 ～立川市・砂川町の合併～

立川と砂川の「立」と「川」をとって、吸収合併じゃなくて対等合併だということを、言ってたよね。



錦町の旧立川市役所で行われた合併祝賀会
(昭和38(1963)年、立川市歴史民俗資料館蔵)



そうそう、立川の「立」と砂川の「川」で、新しい市名は「立川」でいいと。



「立砂」にはならなかった(笑)。

現在に続くまちづくり ～商都・立川へ～



基地（米軍立川基地）返還っちゃうのが立川市にとっては非常に大きな発展の要素になったんじゃないですかね。北口の区画整理ですか、あれもね、飛行場があったおかげで。今のあのモノレールの路線の、あの周辺も全部、もとは飛行場の、基地だったわけだから。



僕がまだ小学生（昭和50〔1975〕年）の頃は、今、映画館や高島屋がある裏側には自衛隊のヘリポートがあって、このファーレ立川というところがだんだん築かれていった。立川駅北口は、人口30万人ぐらいの政令指定都市の表玄関みたい。



南口の開発は私も長い間見てて、もうとにかく難産に難産でずう～と手つかなかったんですよ。あるとき、「南口はこうなるんだ」って、デッキの図面見せられたときにビックリしちゃって。つくってみると、これほど南口の開発が便利になったというのは、本当に夢のようです。



南口駅前広場とペDESTリアンデッキ
(令和5(2023)年)



基地跡地を開発してつくられたサンサンロード(令和7(2025)年)

歴史の「散歩」を終えて ～市史編さんとこれからの立川～



基地が返還になって、まちがまったく変わってきたことが、今度の記録に載るわけですよ。今度の市史の記録に。もうこれから先、こんな大きな変化がない時期に、市史の編さんができたっていうのはね、私は非常にいいタイミングで、市史ができてきたなと思ってる。



戦争が始まって……戦後ずっと復興が進んで、まちが発展して、今の立川は最高にいいと思う。いいんですけど、これに満足しないで、もっともっと住みよい、安心安全な立川をめざしたいと。まあ、今も満足してますけど、より良いまちにしていきたいと思ってます。



基地のまちだったことを、立川市の歴史とともに子どもたちへ伝えていくことが大切。やっぱり政治家としては昨日よりも今日が、今日よりも明日がより良くなったといわれるようなまちにしていきたい、と思っています。これからもお元気で、ご指導いただければと思います。ありがとうございました。

むすびにかえて

昭和39(1964)年に着手された最初の市史編さん事業では、調査の一環で地域ごとに「立川むかしを語る会」が催されたそうです。現在の市史編さん事業でも、戦争体験者のお話を重要な記録のひとつと考えています。今回の番組収録も、地域で長く暮らされる方々がその歴史を語り合う、貴重な機会となりました。(事務局)



撮影協力
ヤマス蔵カフェ

富士見町の住宅街の一角にたたずむカフェ。個人宅の蔵を改装したこの建物も、地域の歴史の生き証人です。

※本記事で用いた写真のうち、出典のないものは立川市撮影。

協力 J:COM

カコミ内のさし絵 山下 祐香理



米国国立公文書館調査から みえる立川市のすがた

立川市の戦後史とは切っても切り離せない米軍基地。その内実について調べるため、市史編さん事業では、令和5年度から株式会社ニチマイに委託し、米本国に保管されているさまざまな公文書の調査・収集を進めています。

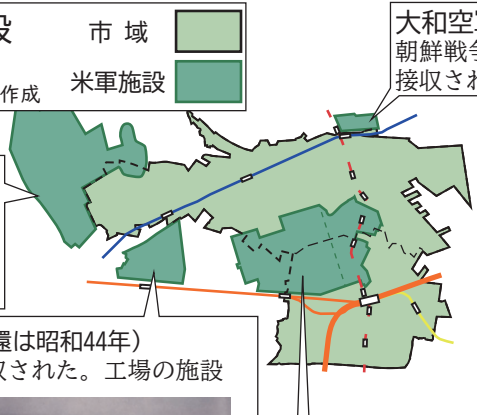
今号では、市史編さん関連展示「立川基地のすがた」(令和6(2024)年3月開催)に続き、これまでの調査で見つかった資料、そしてそこから見えてきた「立川の歴史」の一面を紹介します。

1 「基地のまち」立川市と米軍基地

昭和20(1945)年に米軍の進駐が始まって以降、多摩地域には多くの米軍施設が置られました。立川市も例外ではなく、市域に接して最大で4つの米軍施設がありました。このうち立川基地は市域に占める面積が最も大きく、現在の市域のおよそ6分の1に及びました。日本人を含めて数万人の軍人・軍属が勤務する基地の動向は、地域の社会・経済に大きな影響を与え、また敷地の拡張や航空騒音などをめぐる摩擦も起こりました。

立川市周辺にあった米軍施設
『新編立川市史 資料編 地図・絵図』所収
資料47 [多摩地区米軍基地所在地図] より作成


大和空軍施設 (昭和27年~48年)
朝鮮戦争時に、日立航空機立川工場の跡地が
接收され、米軍兵士の宿舎などが置かれた。



横田基地 (昭和20年~)
陸軍多摩飛行場が接收された基地。
1970年代に関東平野の米空軍基地の
機能が集約され、現在も米軍の拠点
として使用されている。

立川基地 (昭和20年~52年)
陸軍立川飛行場とその周辺の軍施設及び立川飛行機株
式会社の工場が接收された基地。東側にあった旧工場
施設は修理・整備工場に転用され、敷地の西側は輸送
基地として整備された。


昭和基地 (昭和20年~35年、全面返還は昭和44年)
昭和飛行機工業株式会社の工場が接收された。工場の施設
は航空機や車両の修理に転用
された。施設返還後も、滑走
路周辺が軍用ゴルフ場などに
使われた。



返還後の工場(昭和37[1962]年6月)

RG 111SC Box No. 1373
File name: 11078:597041-597080
Photo No. 597057

立川基地へ到着した輸送機 (昭和24[1949]年3月)
RG 111SC Box No. 902
File name: 7336:421868-421907
Photo No. 421882



2 米国調査にいたるまで

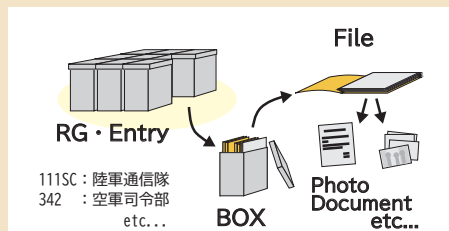
立川市史編さん現代部会では、このように市の歴史と深くかかわる基地をめぐって、米国側の動向も検討課題としました。事業開始以来、市や都が保管する公的記録をはじめ、国立国会図書館が収集した占領軍司令部の記録や、米国政府機関がオンライン公開している記録などを調査しました。その過程で多くのことがわかり、刊行物にも反映してきました。しかし同時に、米国自らが保管している記録でなければわからないことがあることもまた、わかってきました。そこで調査を検討していたところ、新型コロナウイルス感染症の流行に直面し、停滞を余儀なくされることに…。事態が鎮静化した令和5年度から、立川市に関する記録の所蔵状況の調査や資料の収集を進めています。

3 米国の公文書管理機関とは？

米国では、国立公文書記録管理局 (National Archives and Records Administration=NARA) という機関が公文書・公的記録の保管を管轄しています。NARAは合計40億点以上にのぼる膨大な記録を全米各地の施設で保管・公開しています。当事業では、このうちメリーランド州にある国立公文書館新館を中心に、立川市に関する資料の収集を進めています。

6F	Classified Research Room ほか 閲覧制限解除前の文書など
5F	Still Picture Research Room 写真
4F	Moving Image and Sound Research Room 映像・音声記録
3F	Cartographic Research Room 地図
2F	Textual Research Room 第一次大戦以降の文書記録
1F	Researcher Registration and Orientation (受付・案内)

さまざまな形態の記録を保管している国立公文書館新館は、記録形態ごとにフロアが分かれています。



NARAでは、作成元の機関に基づく記録群 (Record Group =RG) 番号、内容によるシリーズ (Entry) 番号などのナンバーをつけて、記録を管理しています。本特集では、記録群番号、箱番号(Box No.)に加え、簿冊名(File name)、写真番号(Photo No.)を示しました。

4 「普段」の米軍基地

日本側に残る米軍基地の写真の多くは、基地が日本人にも開放される友好祭や、市長・議員らによる表敬訪問など、日米間の親善行事の際に撮影されたものでした。一方、米国に残されている記録には、平時の基地の施設内の様子も多くあり、これまで見えにくかった一面が見えてきました。

日本軍の工場から米軍の工場へ (昭和37〔1962〕年7月)

昭和飛行機工業でメンテナンスされる米軍の航空機。立川飛行機や昭和飛行機工業といった「空都」を支えた工場は、接收後には米軍基地の一部として整備工場に使われ、立川一帯の基地を特徴づける施設となりました。

昭和基地の工場施設は昭和35(1960)年に昭和飛行機工業へ返還されましたが、昭和39(1964)年までは米軍装備の修理が同社の受託で継続されました。

RG 111SC
Box No. 1373
File name:11078: 597041-597080
Photo No. 597061



ジャパニーズ・キモノ (昭和22〔1947〕年4月)

横田基地の売店で着物を手に取る米軍の伍長。基地内の売店では、日用品や嗜好品とともに、日本土産も売られていました。

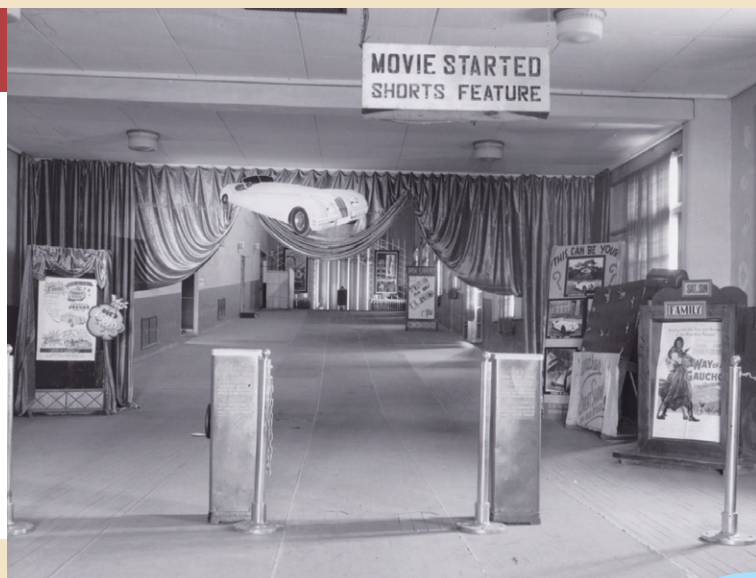
RG 111SC
Box No. 553
File name:3992: 285221-285260
Photo No. 285256

ベース・シアター (昭和29〔1954〕年4月)

立川基地劇場は、立川基地の滑走路の西側、現在の陸上自衛隊立川駐屯地の中央付近にありました。もとは日本陸軍の航空技術研究所が航空機の空力実験に使っていた「風洞実験棟」という建物^{ふうどう}を、米軍が改装して映画館にしたものでした。

このときは、西部劇映画『草原の追跡 (WAY OF A GAUCHO)』が上映されているようです。また娯楽作品だけでなく、パソコンはもとよりテレビやビデオもない時代、業務に関する資料映像を上映する「映画研修」も、この施設で行われたそうです。

RG 342J
Box No. 30E
File name:Tachikawa Air Base
Photo No. 85082AC



5 極東の大交差点、立川基地

立川基地には、その設置時期を通じて輸送・補給を主務とする部隊が駐屯し、米軍の軍事航空輸送サービス (Military Air Transport Service = MATS、のち軍事空輸軍団 (Military Airlift Command = MAC)) に代表される輸送の拠点となっていました。特に昭和31 (1956) 年からは、羽田空港で扱われていた軍事輸送も立川基地のターミナルで受け入れることになり、多くのヒト・モノが行き交いました。



立川基地経由タイ行き (昭和31 (1956)年2月)

「正直者(オネスト)のジョン」と呼ばれた新型地对地ロケット MGR-1 が、タイ王国での訓練に向かう輸送機に積み込まれます。弾頭に戦術核を使えるもので、1950年代後半からの米軍の戦略を支える兵器でした。

RG 111SC
Box No. 1014
File name: 8560: 469270-469308
Photo No. 469270

日本の玄関口、立川 (昭和34 (1959)年12月)

左の人物は、日系人で初めて米国議会に選出されたダニエル・K・イノウエ議員です。訪日の際に MATS が使われ、立川基地に降り立ったとみられます。

RG 111SC
Box No. 1282
File name: 10437: 571541-571580
Photo No. 571565



SAYONARA (昭和34 (1959)年11月)

MATS が使っていた、鳥居をあしらったタラップ。機体やタラップの側面に MATS の文字が見えます。

RG 111SC
Box No. 1296
File name: 10534: 575321-575360
Photo No. 575327



6 米国から見た日本

米国が保管する記録には、基地内のことだけでなく米国側から見た記録として、日本側との交流の姿も残されています。日本側では記録が散逸してしまっている出来事もあり、非常に貴重なものです。

同盟の視察 (昭和32〔1957〕年4月)

米空軍通信隊のドレイファス少佐が、陸上自衛隊立川駐屯地(現在の東立川駐屯地)の通信補給処(通信機材の調達・補給などを行う部署)を視察に訪れたときのものです。

RG 111SC
Box No. 1123
File name:9416: 508217-508256
Photo No. 508240



めざせ、海岸！ (昭和27〔1952〕年8月)

昭和27年の夏、立川市教育委員会と米軍の「共同作戦」で、立川基地のバスが立川市周辺子どもたちを海まで連れていく「海岸作戦(Operation Seashore)」が実行されました。

RG 342J
Box No. 18
File name:D. Civil Affairs-relief and Welfare
Photo No. 12646

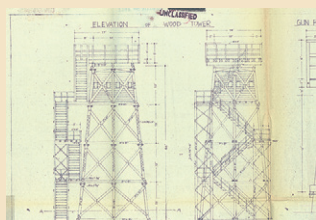
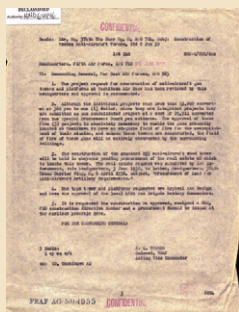
今後の調査に向けて

本特集でご紹介した写真は、これまでに収集した資料の一部です。写真以外にも左のように、文書、地図、図面など、さまざまな記録を収集しています。米軍基地内のことだけでなく、日本国内の公文書に残っていない、日本の出来事についての記述が見つかることもあります。また公文書館以外にも、歴代の大統領図書館や、米空軍歴史研究局なども、立川の歴史とかわる記録を保管していることがわかりつつあります。米軍基地と隣り合わせで歩んでいる立川の現代史を明らかにするために、今後も引き続き調査を進めていきます。(事務局)

協力：株式会社ニチマイ

米陸軍が1946年に作成した立川市の地図(部分・立川駅北口周辺)

RG 331 Box No. 2049



▲1950年頃、立川基地に監視塔を建築する計画の検討資料(抜粋)

RG 342 Box No. 29

参考文献

- 『新編立川市史 資料編 地図・絵図』立川市、2019年
- 『新編立川市史 資料編 現代1』立川市、2020年
- 『新編立川市史 資料編 現代2』立川市、2025年
- 『自衛隊年鑑 1957年』防衛産業協会、1957年
- 『昭和飛行機四十年史』昭和飛行機工業、1977年
- 『東大和市史資料編1 軍需工場と基地と人びと』東大和市、1995年

資料をよむ

仁寛の付法活動と「立川流」

古代・中世部会特定部会委員 近藤 祐介

はじめに

前回『たちかわ物語』19号で「立川流」の祖である仁寛にんかんの生涯について紹介しました。そこで今回は、参考文献として挙げた各氏の研究を参考に、伊豆に配流されたのちに仁寛が行った付法活動^{*1}とその法流について述べたいと思います。

仁寛は、兄であり醍醐寺三宝院流の祖とされる勝覚しょうかくから法流を授かり、密教の教えを弟子に伝える資格を得ました。その後、仁寛は政争に巻き込まれ、伊豆に配流となったわけですが、その伊豆において弟子をとり、法流伝授を行っていました。この仁寛が伝えた法流が、のちに「立川流」と呼ばれることとなります。なお、現在の研究では「立川流」という呼称が、邪教「立川流」と混同されがちであること、「立川流」の呼称の由来が不明な点などから、「醍醐流仁寛方だいがりゅうにんかんがた」、あるいは「三宝院流仁寛方」と呼ぶべき、との見解もありますが、便宜上ここでは「立川流」という呼称を使用させていただきます。

1. 仁寛の付法

「立川流」は江戸時代中期には断絶してしまい、現代には伝わっておらず、また「立川流」と邪教「立川流」が同一視されてしまったこと、邪教「立川流」に関わる経典などが中世後期に破棄されてしまったことなどによって、「立川流」の実態を正確にとらえることが難しくなっていました。そのため、「立川流」について間接的に述べた書や、「立川流」を批判した書などから研究が進められてきました。

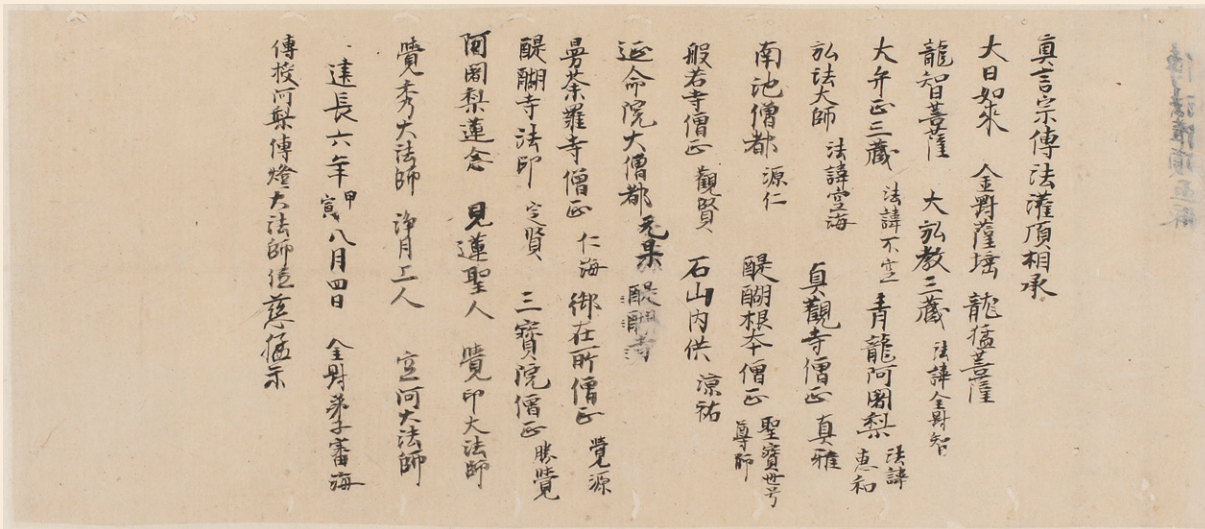
そうしたところ、櫛田良洪氏しゅうたのらうこうが称名寺しょうみやうじ(神奈川県横浜市)に伝わる聖教類(称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理))の中に、称名寺初代長老(住持)の審海しんかいが慈猛じみゆうという僧から与えられた印信^{*2}があり、そこに「立川流」に関わる重要な内容が含まれていることを見い出されました。現在の研究は、こうした称名寺に伝わる「立川流」関連史料(『金沢文庫古文書第九輯しゅう』[金沢文庫、1956年]などに収録)を基礎に進められています。そうした称名寺に伝わる「立川流」関連史料を総合的に考えますと、おおよそ次のようなことがわかっています。

まず、仁寛は伊豆において蓮念れんねんと名を改め、何人かの弟子に付法を行ったようです。なお、そうした弟子の中には、「宝鏡鈔ほうきょうしやう」が言うような、邪教「立川流」を伝えた武蔵国立川の陰陽師なる存在は確認できません。そして、仁寛の弟子のうち一人に見蓮けんれんという人物がおり、仁寛から見蓮へと「立川流」が伝えられ、その見蓮から覚印かくいん・覚秀かくしゆう・浄月上人じやうげつしようにん・慈猛くうあ(空阿)・審海そうじゆうへと法流が相承^{*3}されたようです(9ページ図版1参照)。

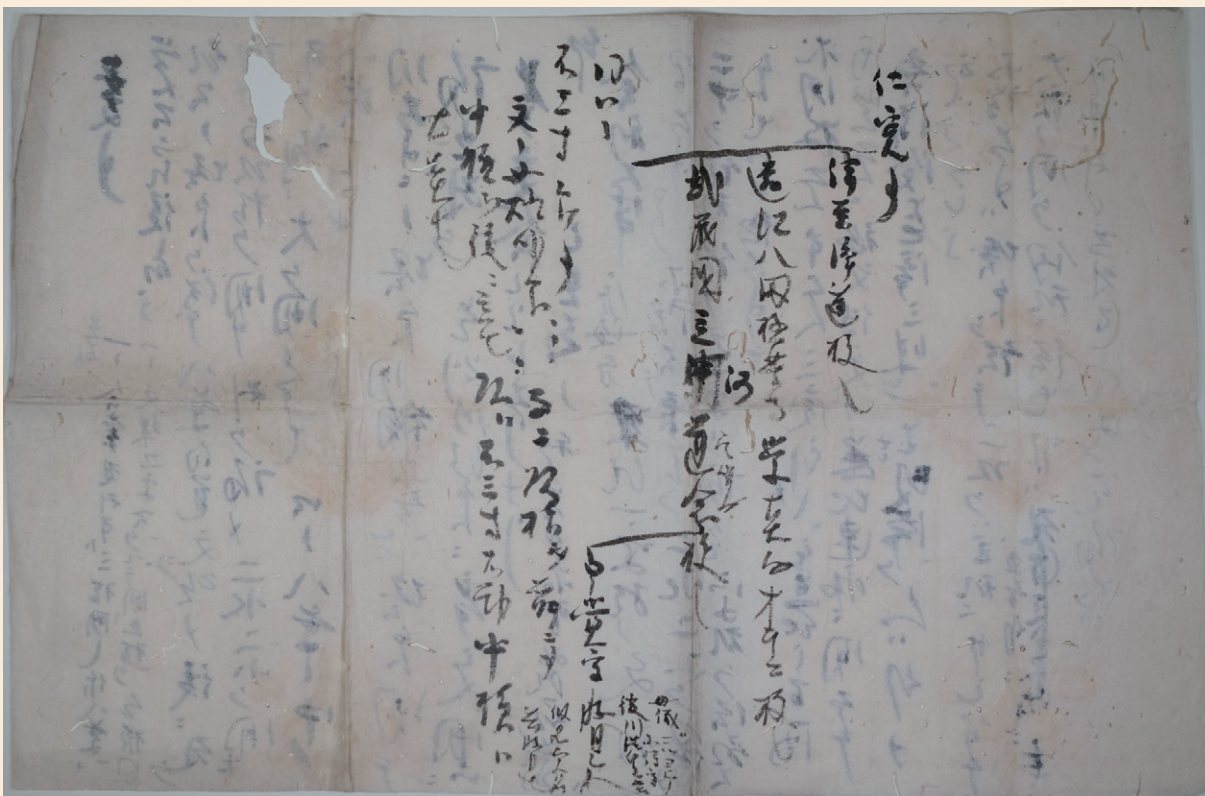
見蓮という僧が、いかなる人物であったのかは、判然としません。称名寺第二代長老である釵阿けんな自筆とされる史料(9ページ図版2参照)に仁寛の血脈けちみやくについて触れた記述があり、そこには「仁寛事」と記したうえで、「伊豆浄蓮授之」「遠江八田極楽寺学真房とのおとうみ■■■^{*4}授之」という二行分の記載があり、さらに隣の行に「武蔵国立河蓮念授之」、「蓮念」の脇に「定明房じやうめいぼう」と記されています。意味が理解しづらい部分が多いのですが、「武蔵立河蓮念」という部分の「蓮念」が「見蓮」の誤りではないかとする櫛田氏の説があります。この説を採れば、仁寛の弟子である見蓮(彼は定明房という房号^{*5}を名乗っていたようです)と武蔵国立川が結びつくこととなり、仁寛が武蔵国立川の定明房見蓮という人物に付法した、と考えることもできそうです。

しかし一方で、見蓮については久能寺くのうじ(静岡県静岡市)という当時天台宗だった寺院で活動した僧侶ではないか、という柴田賢龍氏の説もあり、見蓮と立川との関係についてはなお検討の余地がありそうです。

見蓮から法流を受け継いだ覚印・覚秀についてもやや不明です(覚印については保壽院流の祖として知られている永嚴という僧の弟に比定する説もありますが、生没年からこれを疑問視する見解もあります)。浄月



◀ 図版1「伝法灌頂血脈」(称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)蓮念(仁寛)から審海に至る法流伝授の系譜が記されている。)



◀ 図版2「舍利具支口伝」(称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)右から4行目に「武蔵国立河蓮念授之」と記されている。)

上人は摂津国勝尾寺(大阪府箕面市)の僧であると考えられています。浄月上人から付法を受けた慈猛という人物は、下野国薬師寺の長老で、戒壇⁶を再興するなど、同寺の中興開山⁷ともされる人物であり、晩年には下野国の鶏足寺(栃木県足利市)に移住しています。この慈猛から付法を受けたのが、称名寺初代長老である審海ということになります。すなわち、称名寺初代長老の審海は「立川流」を受法しており、それゆえに「立川流」に関わる史料が称名寺に伝わったのだと考えられます。

2. 「立川流」の実態

それでは仁寛(蓮念)から見蓮—覚印—覚秀—浄月上人—慈猛(空阿)—審海と相承された「立川流」とは、一体どのようなものだったのでしょうか。この点について、慈猛から審海に与えられた印信などを詳細に検討された櫛田氏・柴田氏は、「立川流」が真言宗の諸法流と比較して格別に風変わりなものではなく、邪教的思想(男女の性的な交わりを即身成仏⁸の秘術とするなど)を示すものは認められない、と述べています。これはとても重要な指摘であり、「立川流」が邪教「立川流」として知られているものとは異なっていたことを意味しています。

また、審海は称名寺長老であり、いわゆる真言律宗の僧侶でした。真言律僧は、密教を修めるとともに、戒律を重んじ、戒律に従った生活実践を行う僧たちでした。審海もそうした僧侶の一人であり、当然、女犯^{にょぼん}*9を戒める立場にあったと考えられます。したがって「立川流」が邪教的な要素を持っていたのならば、審海が「立川流」を相承することはなかったはずです。こうした点からも、「立川流」が正統な真言宗から逸脱したものでなかったことがうかがえます。

それでは、なぜ「立川流」が邪教とされてしまったのでしょうか。1268年に誓願房心定^{せいがんぼうしんじょう}という真言宗の僧侶が著した『受法用心集』^{じゅぽうようじんしゅう}という史料があります。『受法用心集』は、これまでは「立川流」批判の書と評価されてきましたが、近年は史料の詳細な検討が進み、心定が『受法用心集』で批判しているのは「立川流」ではない別の集団であったことが明らかにされています。それによると、当時仁寛(蓮念)に始まる「立川流」とはまったく別に、荼枳尼天^{だきに}*10を本尊とし、髑髏本尊^{どくろ}*11を用いた性的儀礼を行い密教を称する集団が存在していたことがわかります。

『受法用心集』は、この集団について具体的な名前を載せず、「彼の法」(その法流)とのみ記されています。この集団こそ、一般的に邪教「立川流」という認識でとらえられていた集団なのですが、『受法用心集』では「立川流」と「彼の法」(邪教「立川流」)は明確に区別されています。そこで現在の研究者は、「彼の法」(邪教「立川流」)については「彼の法」集団とか、その経典から「内三部経流」^{ないさんぶきょうりゅう}と呼び、「立川流」と区別しているようです。

✎ おわりに

以上のように、「立川流」と邪教「立川流」(「彼の法」)とはまったく別の法流であり、集団でした。邪教「立川流」については、13世紀半ばから後半頃に世間に普及するとともに、徐々に疑惑や批判の目を向けられるようになり、14世紀前半頃にはほぼ消滅するに至ったのではないかと、という指摘があります。

そして、邪教「立川流」への疑惑や批判が強まるなかで、次第に「立川流」と邪教「立川流」とを混同するような言説が見られるようになってきます。こうした方向性を決定づけたのが、宥快^{ゆうかい}という僧侶が1375年に著した『宝鏡鈔』*でした。『宝鏡鈔』は仁寛から「立川流」を受け継いだ武蔵国立川の陰陽師が邪教「立川流」を始めたとして、「立川流」を批判しました。これが事実とは異なることは、今まで述べてきたとおりですが、こうした批判により「立川流」の流れは徐々に減少し、とうとう江戸時代中期には途絶えてしまったようです。ちなみに、なぜ宥快が「立川流」を邪教として批判したのかについては、今なお検討すべき点が多いようです。

このように13～14世紀頃に起こった「立川流」に関わる邪教という言説が、時を経て現代の私たちの歴史認識にまで多大な影響を及ぼしたことに驚きを禁じえません。今回の連載を通じて、少しでも「立川流」の実態について理解が深まれば幸いです。

*『宝鏡鈔』について、『たちかわ物語』19号(8ページ)では「1499年成立」と記載しましたが、正しくは「1375年成立」でした。お詫びするとともに、訂正をさせていただきます。

注釈

- ※1 付法活動…弟子に教えを伝授すること。
- ※2 印信…密教で師僧が秘密伝授の証として弟子に与える文書。
- ※3 相承…師から弟子へ学問や教えを伝え受け継いでいくこと。
- ※4 ■■■…判読不能の箇所。
- ※5 房号…僧侶の呼び名のひとつ。
- ※6 戒壇…出家者が正式な僧侶となるための戒(行動規範等)を授ける場所。
- ※7 中興開山…衰退した寺を再興した僧侶のこと。
- ※8 即身成仏…仏教の修行者が生きているうちに仏になること。
- ※9 女犯…女性との交わりを断つべき僧侶が女性と性関係を持つこと。
- ※10 荼枳尼天…仏教の善神とされるが、夜叉の性質もあわせ持つといわれる。
- ※11 髑髏本尊…人間の頭蓋骨でつくった信仰の対象物。

参考文献

- いやはが 彌永 信美「第六十一回智山教学大会講演 いわゆる「立川流」ならびに髑髏本尊儀礼をめぐる」『智山学報』六七輯(2018年)
- 櫛田 良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房佛書林、1964年)
- 柴田 賢龍『日本密教人物事典—醍醐僧伝探訪—』上・下(国書刊行会、2010年・2025年)「仁寛」項、「慈猛」項
- 柴田 賢龍氏のホームページ(最終閲覧 2026年1月27日)
<https://badra20.jimdofree.com/>



令和7年10月～令和8年3月における各部会の活動報告

月	日	活動内容
継続調査		近世部会・近代部会：砂川町個人宅調査
		近代部会：立川市歴史民俗資料館調査
10月	14日	資料整理班：研修（古文書修復実習）
	15日	近世部会・近代部会：資料整理班：大型絵図の撮影
	17日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	19日	近代部会：第2回近代部会
	22日	近世部会・近代部会：資料整理班：砂川村大櫓の撮影
	24日	現代部会：柴崎町個人宅調査
11月	3日	民俗・地誌部会・近世部会：流泉寺墓地調査
	6日	古代・中世部会：江戸氏関係史料調査（千代田区昭和館図書室）
	12日	古代・中世部会：吉良氏・江戸氏関係調査（目黒区円融寺・碑文谷八幡宮・東光寺）
	14日	古代・中世部会：調布市西光寺板碑調査
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	22日	古代・中世部会：普濟寺六面石幢関連調査（立川市歴史民俗資料館）
	23日	古代・中世部会：中世三沢郷・三沢十騎衆関連調査（日野市三沢八幡神社）
29日	近世部会：第3回近世部会	
12月	2日	近世部会・近代部会：資料整理班：砂川村大櫓の撮影
	9日	近世部会：若葉町個人宅調査（立川市歴史民俗資料館と合同）
	11日	現代部会：市民聞き取り調査

月	日	活動内容
12月	13日	民俗・地誌部会：第2回民俗・地誌部会
	16日	近世部会：国分寺市 市史編さん室調査
	18日	近代部会・現代部会：武蔵村山市立歴史民俗資料館調査
	19日	現代部会：現代特定部会会議 市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	現代部会：第3回現代部会
1月	16日	現代部会：市民聞き取り調査 市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	近代部会：第3回近代部会
2月	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	25日	令和7年度市史編さん関連展示（～3月11日） 現代部会：現代特定部会会議
3月	1日	令和7年度市史編さん関連講演会
	11日	現代部会：第4回現代部会
	18日	民俗・地誌部会：第3回民俗・地誌部会
	19日	第26回編集委員会議
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	27日	第21回編さん委員会会議
31日	『新編立川市史 資料編 近世2』刊行	

受贈図書・資料提供者一覧(令和7年度4月1日～12月2日時点)

以下にご芳名を掲載し謝意を表します(敬称略・五十音順) ※資料借用をさせていただいた方のご芳名は除きます。

【個人】足立 秀鋼・優子、岡部 利和、菊地 勝美、小山 二郎・美恵子、清水 岳夫、高橋 静代・亜由子、堤 幸雄、中澤 善一、中野 史朗、西田 啓子、原島 宏美

【機関】清瀬市経営政策部、国分寺市教育委員会、世田谷区政策経営部、立川市教育委員会、立川市社会福祉協議会、多摩地域史研究会、十津川村、成田市教育委員会、延岡市教育委員会、八王子市、羽村市総務部、常陸大宮市教育委員会、府中市文化スポーツ部、武蔵村山市立歴史民俗資料館、横浜市史資料室

地域の歴史がわかるもの、探しています

昭和、戦前、大正、明治、江戸時代…といった古い時代のものばかりでなく、平成や令和の時代の地域の出来事についてのものも、立川市の歴史を将来に伝える大切な資料となります。書籍、書類、パンフレット、チラシ、写真、地図、映像などご提供いただける資料や情報がありましたら、市史編さん室まで、電話、ファクス、メール、LoGoフォーム（電子申請）でのご連絡をお待ちしています。

資料や情報のご提供はこちらのLoGo（電子申請）フォームまたは以下のURLから!



「立川の史料を読む会」で一緒に活動しませんか

市史編さん事業では、江戸時代の立川に関する未解読の古文書を参加者同士で協力して読み進める「立川の史料を読む会」を月1回実施しています。

読むのが難しい古文書もありますが、新しい事実がわかる驚きや発見も味わえる会です。会での成果は今後の刊行物に活用させていただくだけでなく、地域の歴史を明らかにする資料として将来に残ります。

ご興味がある方は、市史編さん室までお問い合わせください。

市史編さん広報紙



市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています

令和8年(2026)3月13日発行
発行元 立川市
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9
編集 文化スポーツ部 市史編さん室
〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル201
TEL (042) 506-0021/FAX (042) 525-1601
E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp
URL <https://www.city.tachikawa.lg.jp/kanko/bunka/1003076/index.html>
LoGoフォーム <https://logoform.jp/form/yY6d/1258036>
印刷 有限会社 広伸印刷



←『たちかわ物語』のバックナンバーはこちらから!



←市史編さん事業に関する詳細はこちらから!

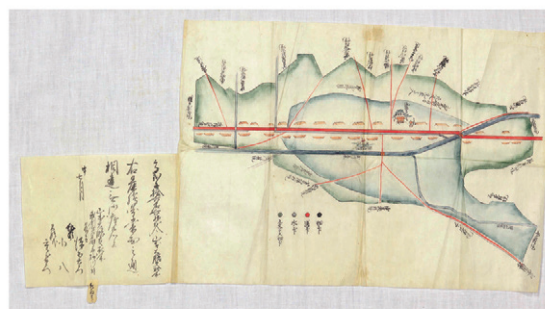
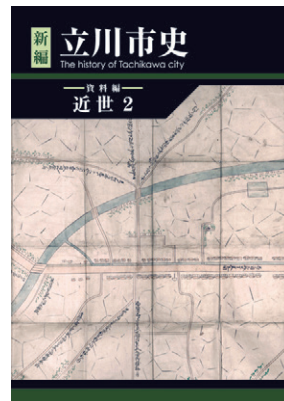


新編立川市史 資料編 近世2

江戸時代の砂川地区の旧家に残された古文書や絵図類を収録しました。冒頭の「この本を読まれる方へ」では、資料編を読む手がかりとして、江戸時代の砂川地区の村々についてわかりやすく解説しています。

第一章では、砂川村の名主役を務めた砂川家の文書について、九節(村のすがたとしくみ、新田開発と村人の負担、鷹場、玉川上水と分水の管理、村の産業、寺社と信仰、村人のくらし、村の情報と文芸、幕末の砂川村)に分けて史料を収録しました。砂川村の由緒にかかわる岸村一件や、砂川家が務めた尾張藩の鷹場預り案内役や玉川上水見廻り役の関係史料など豊富な内容です。また巻末には付録として、砂川家より新たに発見された、万延元(1860)年の砂川村大織(一番組～四番組)を収録しました。

加えて砂川村八番組の組頭を務めた須崎家(第二章)、鎮守の阿豆佐味天神社(第三章)、宮崎家、島田家、山川家、井瀧家など砂川地区にかかわる旧家や寺社の文書(第四章)、中藤家文書などの市外文書(第五章)を収録しました。手に取ってお読みいただける幸いです。(近世部会 部会長 富善 一敏)



『新編立川市史 資料編 近世2』の表紙と口絵掲載資料(天保7〔1836〕年の砂川村絵図)

※『新編立川市史 資料編 近世2』は令和8年4月より販売予定。価格等詳細は、下の〈資料編〉の表をご覧ください。

『新編立川市史 資料編』シリーズ 販売中!!



以下の場所で購入できます

■ 立川市役所3階
市政情報コーナー
立川市泉町 1156-9
☎ 042-523-2111 (代表)

■ オリオン書房ノルテ店
立川市曙町 2-42-1
パークアベニュー 3階
☎ 042-522-1231

■ 立川市歴史民俗資料館
立川市富士見町 3-12-34
☎ 042-525-0860

■ ジュンク堂書店立川高島屋店
立川市曙町 2-39-3
立川高島屋 S.C. 6階
☎ 042-512-9910

資料編は、旧石器時代や縄文時代などを扱う「先史」から、平安時代や戦国時代などの「古代・中世」、江戸時代の「近世」、明治以降の「近代」「現代」、また暮らしの中の文化を記録した「民俗」、資料形態別の「地図・絵図」と「写真集」があります。

< 資料編 >

先史	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文602ページ・上製本	価格 3,500円
古代・ 中世	B5判・カラー口絵16ページ・ 本文604ページ・上製本	価格 2,500円
近世1	B5判・カラー口絵16ページ・ 本文604ページ・上製本	価格 2,500円
近世2	B5判・カラー口絵16ページ・ 本文608ページ・上製本	予価 2,500円
近代1	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文575ページ・上製本	価格 2,500円
近代2	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文580ページ・上製本	価格 2,500円
現代1	B5判・カラー口絵4ページ・ 本文579ページ・上製本	価格 2,500円
現代2	B5判・カラー口絵4ページ・ 本文594ページ・上製本	価格 2,500円
柴崎の 民俗	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文535ページ・上製本	価格 2,500円
砂川の 民俗	B5判・カラー口絵8ページ・ 本文549ページ・上製本	価格 2,500円
地図・ 絵図	A4判・フルカラー・190ページ・ 上製本・DVD付	価格 3,000円
写真集	A4判・フルカラー・367ページ・上製本	価格 4,000円